

JAXA、「イプシロン」5号機打ち上げ 衛星9基搭載

2021/11/9 10:03 | 日本経済新聞 電子版



9基の衛星を搭載し、打ち上げられる小型ロケット「イプシロン」5号機（9日午前9時55分、鹿児島県肝付町の内之浦宇宙空間観測所）

宇宙航空研究開発機構（JAXA）は9日、小型ロケット「イプシロン」5号機を内之浦宇宙空間観測所（鹿児島県肝付町）から打ち上げた。企業や大学などが開発した9基の小型衛星を搭載した。成功すれば、イプシロンでは2013年の初号機以来、5回連続となる。

5号機は当初、10月上旬の打ち上げを予定していたが、地上のレーダー設備の不具合が発生して緊急停止した。その後も上空の風の影響と天候不良の問題で、合計3回延期していた。4回目の挑戦でようやく、打ち上げにこぎ着けた。

イプシロンは世界的に需要が高まる小型衛星の打ち上げに対応するロケットで、JAXAとIHIエアロスペース（東京・江東）が開発した。打ち上げは19年1月の4号機以来。1～3号機は衛星を1基だけ搭載していたが、4号機では7基の小型の人工衛星を「相乗り」で初めて打ち上げ、軌道に投入した。今回の5号機はさらに多くの衛星を載せた。

今回載せた衛星の1つは[川崎重工業](#)のもので、不要になった衛星や部品などで生じる「宇宙ごみ（デブリ）」に接近し、捕獲する技術を実証する。[三菱重工業](#)の災害観測などに使う衛星

も運んだ。国立高専10校が開発した小型衛星も搭載している。

政府は大学や企業などに宇宙での技術を実証する機会を提供するためにイプシロンを使っている。衛星を使った国内産業の育成を狙っている。

JAXAは今後、22年度に6号機を打ち上げた後、23年度には低コスト化を進めた改良型の「イプシロンS」の実証機を打ち上げる予定だ。その後は新型機の運用をIHIエアロスペースに移す。

米国では宇宙ビジネスの担い手を民間企業へ移管する試みが進み、米テスラ最高経営責任者（CEO）のイーロン・マスク氏が率いるスペースXなど、国際競争力を持つ有望なスタートアップが育ちつつある。日本でも[ホンダ](#)が9月に小型ロケット事業への参入を表明するなど、宇宙ビジネスへの参入が相次ぐ。低コスト化など国際競争力の強化が求められている。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.